



校長会



No.47

三重県小中学校長会 広報 第47号

●発行●三重県小中学校長会 津市桜橋 2-142 三重県教育文化会館内 TEL 059-227-7011 E-mail info@mie-kochokai.com
●編集●三重県小中学校長会 広報委員会 ●印刷●光出版印刷株式会社 松阪市久保町 1885-1 TEL 0598-29-1234



私の学校づくり

みんなで創ろう、

一人ひとりが輝く藤原小中学校



いなへ市立藤原中学校

校長 小川 専哉

地域とともにある小中一貫教育校の創出

四月、施設一体型小中一貫教育校が開校し、「学びと育ちをつなぐ途切れない教育」が始動しました。その鍵を担うのは中学校(生)だと考えています。なぜなら、小中一貫教育の最大の利点は、義務教育九年間の到達ゴールを小中の教職員が共有化できることにあるからです。

まさに、歴史的な転換期に学校・家庭・地域・行政総がかりで子どもたちの未来を思い描き、十五歳の生徒像を共通認識し、子どもたちの「生き抜く力」・「生きまわす力」・「生き拓く力」を育む教育を目指しています。

藤原スタイルの深化

本校の授業実践の土台には、「藤原スタイル」と呼ぶ(特別)支援教育の視点が生きています。誰もが安心することができ、自信が持てる学級・学校づくりの実践では、生徒に「意志ある学び」を意識させて、「二人力」と「仲間力」を高める進路(生き方)指導へとつなげています。

WAVE学習(未来いなへ科)の推進

平成十四年度に体系化したWAVE学習(総合的な学習の時間)は、「地域を知り、地域に学び、地域に発信する」と、「自己を見つめ、生き方を考える」を二大テーマに、多くの大人との出会いや仲間との協働を通して感性を磨き、未来を拓く実践力を培うことが目標です。生き方につなげる学習は、小中一貫教育の重点でもあります。

生徒会活動の充実 地域との協働

「生徒の授業や学校づくりへの当事者意識の高さと、教師の熱意が重なり、藤原の大きな力となっている」との評価をいただいています。本題の学校スローガンを掲げた三十年前と変わりなく、今も伝統として生き続け、生徒会が授業をはじめ学校生活全般を企画立案・運営し、自らの姿勢を見つめています。

今後も主役である生徒の力量と限りない可能性を信じ、更なる自治能力向上につなげるとともに、児童生徒の成長を軸とし、学校が核となり地域との新たな協働関係を構築していきたいです。

今日的課題の克服に向けて

一人一人の子どもが大切にされる学校づくり



志摩市立神明小学校
校長 浜田 元宏

本校は、志摩市のほぼ中央に位置し、昨年度「伊勢志摩サミット」で何かと話題になった賢島を校区に持つ小学校である。全校児童数は二百三十名、学級数は特別支援学級を含めて十二学級である。地域の産業としては真珠養殖を中心とした水産業、そして農業や観光業が主なものである。地域の教育力は全般的に高く、学校教育活動に対しては非常に協力的な家庭が多い。課題としては、①学習習慣の定着を含めた学力の向上、②子どもの自己肯定感を高めること、等が挙げられる。

一、安心・安全な学校づくり

子どもたちが学校生活を送ると

き、最も大切なことが「安心・安全な学校」であることと考える。そのため……

(一) 確かな力をつける授業づくり

大切にしたい一つ目のことは「子どもに確かな力をつける」ということである。そのためには教師の「授業力向上」の取組は不可欠である。校内授業研究会を充実させ「よくわかる授業」「魅力的な授業」をめざした授業改善の取組を進めている。

(二) 一人一人の子どもが大切にされる仲間づくり

安心・安全のキーワードの二つ目は「一人一人の子どもが大切にされる」ということである。それはすべての子どもに「居場所」があるということでもある。そのために、すべての教育活動の基盤に「仲間づくり」をすえて取り組んでいる。「仲間づくり」をテーマにした校内研修会も行っている。

二、子どもたちが地域を誇りに思えるために

さらに子どもたちの自己肯定感や自尊心を高めるために有効であ

ると考えているのが「地域学習」である。大切なことは、学習を通して「地域を誇りに思える」ということである。自分たちの地域を「知り」「誇りに感じ」そして何かを「選んで」いけるような地域学習を構築していきたい。

今年度は「ポストサミット」ということで、聞き取り活動を行った上で地域の良さ、素晴らしさを発信する取組を行った。志摩観光ホテルの料理長、観光船会社の職員、志摩マリナランドの職員、真珠販売に携わる方からいろいろなお話を聞かせていただいた。

三、教職員がやりがいを感じ、楽しく働ける職場環境づくり

そうした学校をつくっていくためには教職員の不断の努力が必要となる。総勤務時間の縮減に取り組むとともに、教職員が「やりがい」を感じながら働くことができる職場環境づくりが大切であることは言うまでもない。

教職員との対話を大切に、その中からの「気づき」を大切にしたいと考えている。特に、常に「何のために」を考え、目的意識を持ちながらあらゆる教育活動に取り組むよう心がけている。

また、働きやすい職場の雰囲気も大切な要素の一つである。

いつも明るくあいさつを交わし互いに笑顔で接し合い、協力し合う、職員は互いに敬意を持ちつつ感謝し合い、困ったときには助け合う、いつも職員室では子どもたちが話題になり、そして職員みんな子どもたちがみんなを見ていこうとする雰囲気がある、そんな雰囲気職場をこれからもめざしていきたいものである。

まずは私自身が明るく元気なあいさつで一日を始め、笑顔で職員と接し、そして大いに対話をしていきたいと考えている。

地域に根ざした学校づくり



尾鷲市立賀田小学校
校長 田中 利保

本校を含め東紀州地域の課題として挙げられるのが、児童数の激減による学校統廃合問題である。そこで学校側ができることは何なのかを考えると、今、在籍している子どもたちの健全な成長発達を確実に保障することではないかと

考える。各学年五人前後の児童数で、おのずと複式学級を編成しなくてはいけない。そうすると、先ずは、学力保障である。複式学級での授業の組み方(わたり方式等)で担任が大変苦労するところである。また、人数の少なさからくる生徒指導上の難しさなど、子どもたちの学校生活を有意義なものにすることは思った以上に大変である。

一、本校・地域の概要

過去三回の統廃合を経て、六町という広い校区を有する学校である。全校児童二十五人である。遠い地区からスクールバスで四十分近くかけて登校している児童もいる。一年生の児童にとつては大変苦痛なことである。児童数減少の一因として考えられるのは地域産業である水産・林業の衰退である。現在、それらに関連した事業に従事している保護者は二人だけである。

二、本校教育の特色

これだけ児童数が少なくなってきた中、子どもたちの成長発達を保障するためには、学校・地域の特色を活かした教育を打ち出さないといけないと考えている。そこで、地域を知り、地域に学び、地域を愛する児童の育成を本校の

教育の大きな柱にしている。学校の周りには山、川、海といった豊かな自然がある。そして、何よりもそれらを守り育ててきた文化・歴史と地域の人々の存在がある。そういう利点を教材として、子どもたちに多くの体験を通した学びを本校の特徴として教育を構築している。

三、地域の自然を対象とした文化・歴史・人・食育

年間を通して、多くの地域学習を組んでいる。代表的な取組を挙げると、トチの学習である。地域の方々が何百年と守り育ててきたトチの森がある。そのトチの実を拾い加工してトチ餅を作る伝統的な食文化がある。地域の方々に教えていただきながら、トチの花観察・実拾い・加工作業・あく抜き作業・餅つきという一連の作業を行っている。その取組で歴史・文化そして地域の方々との交流を大切にしている。また、本校の目の前に世界遺産に登録された熊野古道がある。地域の方で登録に尽力された語り部さんがいて、夫婦で羽後峠・三木峠などを復活させた。その方の指導を受けて、子どもたちにふるさとの財産である熊野古道を遠足等で実際に歩く活動を行っている。

四、これらの活動を通して

子どもたちが地域に目を向けるようになり、自分の育った地域に対して誇りと愛着を感じることが出来る。あわせて、人とのつながりを強く意識するようになる。子どもたちの前になるとおじさん・おばさんたちは非常に頑張り、笑顔になり、冗談を子どもたちに言ってくれる（子どもたちに受けないことも多いですが）。そういう人たちに地域はもちろん学校も支えられているということを実感する。

しかし、児童数の減少には、なかなか歯止めがかからない。学校ができることは、今、ここで育っている子どもたちに、そして、今、ここで子どもを育てている保護者の皆さんに、この地も捨てたものではないということを感じさせることであり、大きく捉えれば学校愛、郷土愛を育んでいく活動になると考えている。



「人工知能」

松阪市立東部中学校
校長 野呂 一彦



将棋の世界に一大旋風を巻き起こした藤井聡太四段は、二〇〇二年愛知県瀬戸市に生まれました。

中学生でありながら、強者がひしめく将棋界において公式戦29連勝の記録を打ち立てたのは驚きでした。また、報道陣のインタビュウに対する彼の受け答えは、まことに謙虚であり、真摯な人柄が想像できて尊敬しています。藤井四段の活躍と同時に話題に上ったのがAI将棋。伝統的な将棋のセオリーに加え、彼は、コンピューターとの対局の中で、今までの将棋にはない打ち手を身につけていったといえます。囲碁の世界でも、人工知能と韓国のプロ棋士イ・セドルさんの対局が話題になりました。結果は五番勝負中四番で人工知能が勝利しました。人工知能は、経験をもとにどんどん自らの性能を上げていくのだそうです。人間が打ち込んだプログラムだけでは

く、自分で学習していくわけです。今はまだ開発途上にはありますが、いろいろな分野に応用されれば第四の産業革命になるのではないかと注目されています。

私たちが子どもだった頃、洗濯機には脱水機能は付いていませんでした。テレビはモノクロ。自家用車を持っていない家は少なかつた。急ぎの連絡をするために近所の家に電話を借りた覚えがあります。携帯電話をポケットに入れて持ち歩いているなど、想像すらできませんでした。時代はどんどん進歩していきます。人口知能の発達によって世の中は急速に便利になっていきます。車の自動運転で交通事故が少なくなったり、運転手不足が解消されたりします。医療分野では、病気の早期発見や治療ができるようになったり、話し相手になって「癒し」を与えてくれるロボットが開発されたりします。犯罪捜査の分野で利用することによって犯罪の防止や早期解決につながるなど、未来社会への夢が広がります。

ただ、生物の能力は使わないと退化し、使えば使うほど進化していくことを忘れてはなりません。私自身、カーナビを使い出してから地図を見て旅行プランを立てたり、事前にシュミレーションしたりしなくなりました。この原稿もコンピューターを使って書いていますが、ペンで文章を書くことが減ったためか、最近、漢字が書けなくなつたような気がします。人も自らの機能を維持するために努力しなければならぬ時代が来ているようにも思われます。また、十年後には、労働者の三分の二ほどは、今はない職業に就いているだろうと言われています。

人工知能の学習スピードがどれほどなのか分かりませんが、人間はゆっくり成長していきます。理屈と感情で行動を判断します。次世代を担う若者たちには、人工知能を良きパートナーとして、人と人が繋がりが合つて幸せな未来社会を築いていくために、柔軟で寛容な想像力と創造力、そして、face to faceのコミュニケーション能力を身につけていってほしいと思つています。将来、私がロボットを手に入れたら、優しい言葉で話しかけます。楽しい雰囲気です。そうすれば、ロボットは、私の好きな話題や言葉を覚えてくれて私に話しかけてくれるだろうし、私の心が癒される雰囲気を作ってくれるだろうと思つています。さて、ロボットの名前は何にしようかな？

第69回全連小佐賀大会報告

未来を創る子どもたちに
「あたたかく つよく しなやかに」

伊賀市立上野西小学校

校長 古城 正美



十月十二日・十三日、全国から多くの会員が、参加して、第69回全連小大会が、豊かな自然と文化に恵まれた佐賀県で開催された。

三重大会から設定された大会主題「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」も五年目となり、これまでの研究の成果と課題を受け継ぎ、本年度はさらに深化と発展をめざす大会となった。

開会式の後、文部科学省大臣官房審議官白間竜一郎氏からの講話では、「教育再生実行会議」「新学習指導要領」「外国語教育改革」「教員の働き方改革」「新学習指導要領の円滑な実施と学校における働き方改革のための指導・運営体制の充実」の五点にわたって説明が

行われた。

特に「教員の働き方改革」では、平成二十九年六月に中央教育審議会に諮問され審議された内容や、「学校における働き方改革に係る緊急提言」について、詳細な説明が行われ、文部科学省としても教職員の長時間勤務の実態を改善するとともに、教育の質の確保・向上の観点から「学校の働き方改革」を早急に進めていくとの姿勢を示された。

続いて、大会主題及び、副主題である「志を胸に 高きに和して 未来を創る 子どもを育てる 学校経営の推進」についての趣旨説明が行われた。高い志を抱きながらも、未来創造のために他者との協働を厭わず、よりよいものへと高める日本人の和の心を育むことの大切さが強調された。

大会二日目には、全体会で分科会の研究協議のまとめ、大会宣言の採択が行われ、続いてシンポジウムが開催された。「未来を創る子どもたちに “あたたかく つよく しなやかに” というテーマが設定され、佐賀県にゆかりのある三名のシンポジストが、「あたたかさ」「つよさ」「しなやかさ」

の視点から、未来を創る子どもたちと、私たち校長へのメッセージを熱く語っていただき、校長の役割・指導性について深く考えさせられる大会となった。



全連小佐賀大会 第2分科会に参加して

鳥羽市立鳥羽小学校
校長 柴原 豊彦



第2分科会は「学校経営ビジョンの実現と活力ある組織づくり」

組織運営」という研究課題について、二つの発表があった。

視点①「学校経営ビジョンの実現に向けた活力ある組織づくり」では、教師力と同僚性を生かした学校運営の活性化について、山形県の発表があった。

学校課題を把握し、校長が明確な学校経営ビジョンを提示すること。同僚性を「教職員や分掌同士の集団としての力」と、教師力を「教職員同士、分掌同士関わりが密になり、教育活動の質が高まること」と定義づけ、職員の参画意識の高揚を図ること。この二点から学校運営の活性化をめざすというものであった。

視点②「学校経営ビジョンの実現をめざした学校運営の推進」では、鹿児島県からの発表があった。

桜島にある全校児童二十八名という規模の中で、校長として、活力ある学校運営の推進のために「心の教育の推進」「確かな学力の育成と教職員の資質向上」「地域に開かれた学校」「体力の育成」「防災意識の高揚」という焦点化したポイントを設定しての取組であった。

それぞれの発表を受けて、グループ協議で熱心な意見交流が行われた。二つの発表に共通して協議されたのは、①組織づくりの核となる校長の役割②組織としての人材育成、世代交代への対応③課

題と実態に応じた学校運営のあり方④教職員の学校運営への参画意識の高揚を図ること、の四点についてである。校長として、これらの課題への対応、リーダーシップのあり方が重要であり、さらに「洞察力」「コミュニケーション力」「調整力」と「地域・関係機関・学校間の連携」「情報発信」「人材育成」等について、校長が研鑽に努めることが大切であることを確認できた分科会であった。



中学校教育70年記念 第68回全日中東京大会報告

伊勢市立伊勢宮川中学校
校長 東浦 道範



新制中学校が発足して70年という記念の年、第68回全日本中学校長会東京大会が十月十九日・二十日に東京国際フォーラムで開催された。「社会を生き抜く力を身に付け、未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育」を研究主題として約三千八百名の会員が参加した。

一、記念式典

皇太子同妃両殿下の御台臨の下、記念式典が開催された。式辞に続き、文部科学大臣の挨拶、皇太子殿下のおことば、参議院議長のおことば、式典の後、皇太子同妃両殿下が被災した県の代表におことばをかけられたと聞き、そのお人柄に感銘を受けた。

二、全体協議会

開会式に続き、全体協議会が開かれた。北海道地区の「未来を切り拓くためのキャリア教育の視点

に立った進路指導の充実」では、自分の進路を選択決定する能力・態度を身に付けさせる仕組みづくりが紹介された。一つ一つの実践は計画的、系統的で大いに参考となった。四国地区から「時代の要請に応える学校経営の充実」の発表があり、教員が教育活動を常に見直す意識を持つように、学校評価を活用した実践が紹介された。

三、文部科学省説明

文部科学省大臣官房審議官から、「教育再生実行会議」、「新学習指導要領」、「学習評価」、「働き方改革」、「部活動」、「平成三十年代予算要望」などについて説明があった。今後、ますます校長のリーダーシップによるカリキュラムマネジメントの実現が重要になると改めて感じた。一方、教員の長時間勤務の要因を見直すことで、教員一人一人が様々な経験を通じて自らを研鑽できる機会を持つようになり、更なる効果的な活動へとつなげていくことができるという視点での話は説得力があり、教員のためにも是非実現させたいと思った。

四、大会宣言決議

全日中教育ビジョンに基づく学

校からの教育改革を推進し、新たな中学校教育の創造に努めるとの決議がなされた。

五、記念講演

「私の半生を振り返って」と題してノーベル生理学・医学賞受賞者の大村智先生の講演があった。博士は人生を語るのにその時その時のキーワード「人のためになることをやりなさい」「眺望は人を養う」「子供のころに肉体的に辛い経験を与えないと大人になって人間的に不幸である」「正師得ざれば学ばざるに如かず」を用いて話を進められた。

博士は一期一会の出会いを大切にし、その付き合いを長く続けてきた。博士の人を大切にすることを学べ、何事も徹底する生き方から多くを学ぶことができた。



ちよごと いい話 2本の傘

亀山市立川崎小学校
校長 伊達 弘



度はその数は増加します。子どもの安全を願うことであるうとは思いますが、必要以上と思える事例がいくつもあります。

そんな中、こんな場面がありました。お昼過ぎからの急な雨の日、ある児童の祖母と名乗る方が学校へ来られました。手には2本の傘を持って・・・一緒に車に乗って帰るのだろうと、「おばあさん、下校時刻はまだ四十分ほど先ですよ」とお伝えしたところ、「置き傘が無いはずですので、傘を下駄箱へ置いて帰ります。メモと一緒に」
「お迎えではなかったのですか？」と聞くと、「歩くことが大事ですから。友達との帰りの道の楽しみも無くなりますし」とおっしゃいました。なぜ傘が2本なのかを尋ねると、「傘が無くて困っているお友達がいたら、使ってもらいなさい」とメモに書いてあるのだとのこと・・・

自分の家の子のために、そして自分の家以外の子のために・・・、大きな愛情に接した気がしました。

授業参観でのマナーや運動会の場所取りなど、保護者への禁止や規制をすることが増えてきましたが、「正しい愛情とは如何なるものか」、子どもたちを慈しむ全ての人と一緒に考え、見つけ広めていくことが大事であると思いきこせていただいた今回の場面でした。

昨年度九月に着任、同時に新校舎建築の二期工事が始まり、一年が過ぎました。本校の新校舎は、地域との協働をはじめ新しい機能を求めたものです。従前からの校地に、旧校舎の一部を取り壊しては、新校舎の一部を建築していく。これを繰り返すため、この一年間は工事日程と学校の日程を調整し、安全管理に追われる毎日でした。すべての工事を終える平成三十年代末までは、教室や運動場をはじめ施設の使用に制限があり、駐車場のスペースにも余裕はありません。最近では、やたらと保護者による児童の自家用車送迎が増えまじった。不要な送り迎えを控えるよう呼びかけはしますが、核家族化がすすむ校区の事情や、不審者や交通事故のニュースが世間を騒がす

先生変わらんね

桑名市立陽和中学校
校長 石川 昭人



平成元年度から八年間勤務した学校に、二十年ぶりに四月から校長として着任し、半年過ぎました。二十年の歳月は長く、変わったと思うことがいくつもあります。たとえば、校舎がずいぶん傷んだなあとあります。自分が陽和中に着任したのは、今思えば、新築されて、三年経っていない校舎でした。当時の子どもたちや先生方が校舎をきれいに使うという気持力が強く、本当にいい状態でと努力していたことを今でも覚えています。当たり前ですが、大切に使用していても至る所に傷みが出ていて、もの悲しい感じがしています。

また、学級数も各学年六〜七クラスあったのが、今は四クラスと半分ほどの規模になり、体育館やグラウンドに集まっても、本当に少なく、さみしい感じがします。一方、このように変化はあるもの

の、脈々と引き継がれていること
もあって、感心することも多くあります。

ところで、保護者の中に教え
がかなりいます。それも、事ある
ごとに新たに教え子だということ
が分かり、本当のところ何人い
るか掴めていません。教え子が保
護者でいることは、自分の行っ
た教育を考えたり、振り返り
することに なります。

これまで、何人か、そんな教
子と話す機会がありました。「先
生、覚えていてくれたん」「先生
変わらんね」とよく言われます。ま
た、なかには「先生が来てくれ
てよかった」とか「うれい」と言
てくれる子もいます。陽和中を離
れてから二十数年のうち、半分以
上を学校以外の場所で勤務して
いた自分にとってはそんな言葉を直
接聞くことができることは嬉しい
ことです。また、必ず反対のこと
を思っている子がいるとも思っ
ています。

このように声を直接聞けた教
子だけではなく、自分自身が先
生方と様々な取組を行っていくこ
とで、今以上に通わせてよかった
と思えるような学校に変えていける
可能性があることは、夢のあるこ
とだと改めて感じています。

第54回三重県小学校長教育研究大会

平成29年7月27日(木)



開会行事



記念講演(山本 命)



分科会グループ討議

分科会

第54回三重県中学校長研究大会

平成29年8月22日(火)



開会行事



記念講演(岸川 政之)



特別寄稿

成長しよう子どもと共に、
広げよう保護者の輪

三重県PTA連合会

会長 松山 安利



先生方には、平素は子どもたちが大変お世話になっております。心からお礼申し上げます。

PTA活動にもご理解・ご支援をいただいていることを、皆様に厚く御礼を申し上げます。私達は大切な子どもの成長とよりよい学校生活を送ってもらえるよう日々活動しております。PTAが保護者と先生と子どもたちと地域とをつなぐ役割をもつことで、よりよい環境を築いていきます。

PTAは、子どもたちを守る団体であると同時に大人自身が学びつながらの場でもあります。実際に参加された皆さんは、やって良かった・楽しかったと言います。

I Tの発達、24時間社会の到来などにより私たちの生活環境は急

いくのかなど、PTA活動をおおして情報を共有しながら、子どもたちと共に夢を抱くことが出来ないものでしょうか。

教育再生が問われ、教育基本法が新しくなり、教育現場の在り方が「親」の理解を超えるスピードで変化しています。昔はこうだったとか、長女の時はこうだったと言っている時点ですでに変化に対応できていないと思います。子どもたちは世の中に順応するよう頑張つて成長しております、保護者もそれに負けじと成長しなければと思います。

PTAや子どもたちを取り巻く環境にも厳しいものがあります。携帯フィルタリング問題、社会を震撼させる子どもの凶悪な犯罪、虐待、ネットいじめなど、今解決をしなければならぬ課題には早急に対応していかなければなりません。

それに、文部科学省等々でも発表されていますが、今から十数年後の中学生の子どもたちが、大学を卒業するころには、半分以上の職業が自動化されて、もう少し小さい子どもたちが大学を卒業するころには65パーセントが、ユーザーのように、かつて存在しなかった職業に就職し、頭脳労働までもがコンピュータにより代替えと言うような予測がなされています。

このように、この先社会全体がどのように変化していくかわかりません。可能性に満ち溢れた子供たち一人ひとりに最適なプログラムで、社会のニーズに合うような子どもになるよう、教育のほうもよろしく願います。

最近は何れにも相談できなくて一人で悩んでいる保護者が多く見受けられるように思います。悩み事が共有できて、自分だけじゃないんだと言う事に気付けば、自然と保護者の輪も広がり、心に余裕をもつて子育てができると思います。

このように、スマホ問題・学力問題・貧困問題などいろいろな諸問題に少しでもお役に立つような事業を行っていきたいと思います。

現在、学校における働き方改革の議論が進められております。中学校の先生方は部活動での過重労働が問題視されています。また、小学校でも過労死レベルの先生がとも多いと発表されております。このことから、本当に先生の人数が足りているのかという議論になります。私達も教育の質向上から教職員の定数改善を要望してまいりました。今後もこうした活動を発信し続けていきたいと思

います。今年度は、今までと違い、今までやってきた事業が無くなり、東海北陸ブロックPTA研究大会に向けた新たな事業が始まります。

先生方にも少しご迷惑をかけますがそちらの方にたくさんのご参加をよろしく願います。私達は今しかできないPTAを、各都市PTAの皆さんと協力しながら、楽しんで活動をしていきたいと思ひます。ご理解ご協力のほどよろしくお願い致します。最後になりましたが、三重県小中学校長会の益々のご発展とご活躍をご祈念申し上げます。

中学校教育70年記念式典

- 平成21年度理事 大谷 徹
- 平成22年度理事 小椋 猛
- 平成23年度理事 鈴木 一良
- 平成24年度理事 鈴木 就二
- 平成25年度理事・26年度副会長 下村 純也
- 平成26年度会計監査 竹内 勇夫
- 平成27年度理事 加田 普士
- 平成28年度理事 鏡 仁治
- 平成29年度理事 川合 陽一郎
- 事務局 宮田 典子

中学校教育70年記念式典において、全日中役員として活躍された方及び長期勤務されている事務局員に感謝状が贈呈されました。

地区校長会だより

名張市小学校長会

名張市は、昭和二十九年市制施行以来、一貫して単独市を維持し、現在人口は約七万八千人の市です。

平成十九年度まで十八校あった小学校も、統廃合により現在十四校となっています。

三重県西部に位置し、大阪方面のベッドタウンとして発展してきた名張市ですが、全国的な経済・社会状況と同様の傾向として、少子高齢化による児童数の減少が続いています。市は、子どもたちの未来を見据えた学習環境の充実に向けて、学校規模・配置の適正化、小中一貫教育、コミュニティ・スクールの導入等の施策を打ち出しています。各校長のリーダーシップのもと、先を見据えた学校経営ビジョンの実現に向けた活力ある組織づくりや運営の推進が求められています。

そこで、名張市では、小中合同での「名張市小中学校長会」を組織し、十四小学校長と五中学校長の十九名で活動しています。五つの学校経営研究会と三つの特別

部会のいずれかに所属し、今日的な教育課題の解決に向けた調査・研究や研修に努めています。また、年間十回の定例会を開催しています。定例会では、市教委からの付議事項やそれぞれの担当からの報告、学校運営に関する今日的課題についての意見や情報交換を含む全体会と小中の校種別部会を行っています。

小学校部会では、さまざまな課題や各校の取組について、協議や情報交換を行っています。課題解決のヒントや元気がもたらえる関係を大切にして、共通する諸課題の解決に努め、名張市の教育の充実と発展を目標にして邁進していきたいと考えています。

小学校部会では、さまざまな課題や各校の取組について、協議や情報交換を行っています。課題解決のヒントや元気がもたらえる関係を大切にして、共通する諸課題の解決に努め、名張市の教育の充実と発展を目標にして邁進していきたいと考えています。



鈴鹿市中学校長会

心の通い合う校長会をめざして

鈴鹿市の公立中学校は、生徒数約千人と約九百人の大規模校二校を含む十校です。五月現在の生徒在籍数は、約五千八百人となっています。

昨年鈴鹿市は、市長が策定した「鈴鹿市教育大綱」を計画の軸に位置づけ、平成三十一年度までを見据えた、新しい「鈴鹿市教育振興基本計画」をスタートさせました。基本理念に「鈴鹿を愛し、子どもの学びと安全・安心を支え、絆で育む鈴鹿の教育」を掲げ、「自己実現と人との協働により、豊かな未来を創る力を備えた鈴鹿の子ども」を育むことをめざしています。

また、めざす子ども姿を実現するために以下の三つの基本目標を設定しています。
一、知識基盤社会を生き抜く力を育む教育内容を創造します
二、家庭や地域と共にある学校づくりを推進します
三、社会の変化や技術革新に対応した教育環境を整備します

鈴鹿市の各中学校では、これらの目標達成に向け、地域や子どもたちの実態を踏まえ創意工夫ある学校経営を進めています。

今年度は六名の新しい仲間が加

わりスタートしました。定例の幼小中学校園長会の他、年間八回の自主中学校長会をもち、中学校教育の課題等について意見交換し、共通理解を図りながら解決に向け取り組んでいます。特に重要な課題である子どもたちの学力向上については、市教委が平成二十三年度から進めている鳴門教育大学との連携事業を活用し「鈴鹿型授業力向上モデル」の取組を足並みをそろえながら進めています。

日々の学校運営で悩んだり判断に困ったりした時、中学校長会の仲間の存在が計り知れない支えとなつていきます。今後も互いの連帯感を高め十校長が一丸となつて鈴鹿の教育に邁進していきます。



原稿募集

会員の皆様の投稿をお待ちしています。なお、内容・字数等につきましては事務局へお問い合わせ下さい。

●「校長会みえ」について、「意見・ご要望があればお聞かせ下さい。」

三重県小中学校長会
広報委員会

編集後記

三重県小中学校長会広報「みえ」の第47号を発行するにあたり、執筆を依頼させていただいた先方には、お忙しい中早々に原稿をお送りいただきありがとうございます。心より感謝申し上げます。

さて、今号では全連小佐賀大会や全日中大大会についても、詳しく報告していただきます。

来年度は第53回東海・北陸地区連合小学校長会教育研究大会が三重県で開催されます。平成30年10月18日・19日の開催に向けて役員・研究部の皆様を中心に、準備を進めていただいています。

今年の愛知大会では、「支援型リーダーシップの在り方」をサブテーマに討議が進められました。

実りある大会にするためにも、夢の実現に向けて主体的・協働的に学び、共に未来を切り拓こうとする子どもを育む学校経営の推進に向け、実践を進めましょう。

この会報が、学校の日々の課題に真摯に向き合い、努力を続けておられる校長先生方の力になれば幸いです。今後とも、ご支援ご協力をよろしくお願い申し上げます。